

## あるクラン・ブックの分析

### ——バソガの相続と継承——

中 林 伸 浩

#### 1 クラン制度の概要

ウガンダのバソガ (Basoga, ソガ族) の社会組織における二大支柱は、伝統的に父系のクラン (氏族) と首長制であった。20 世紀初頭からのイギリス植民地時代、1962 年以後の独立国家の時代を通じて、彼らの地方 (Busoga) における社会組織はさまざまな変化をした。たとえば、彼らの社会は、もともと、独立した数十の小王国からなっていた。それが次第にウガンダという国家の下位の地方行政組織として改編され、現在ではほぼ完全に近代的官僚制にとって代られている。氏族制度の方も、政治経済的变化、あるいは価値感の変化に伴って、クラン特有の法的・道徳的規範における変化が当然おきている。しかしそれでも、一般の農民の住む農村部では、相変わらず、首長制とクランは社会組織上の基本的な枠組であるということ是可以する。

まず首長制であるが、たしかに王をはじめとする上級の首長の地位は、廃止されるか、あるいは行政的な官僚制へと姿をかえた。しかし村段階に密着して存在していた、最も下級の世襲的な首長職は、現在の地元行政組織に正式に組みこまれなかったために、かえって伝統的な首長の権利が人々の間に慣習的に認められ続けることになった。

この伝統的首長には二段階あって、上位の方をムラタ首長、下位の方をキソコ首長といい、その支配地をそれぞれムラタ (mutala), キソコ (kisoko) という。ムラタは数個から十数個のキソコからなっている。両方とも村の中の準政治・行政単位として現在重要な意味をもっている。<sup>注1)</sup>

他方氏族制度は、首長制にくらべて、変化の程度はずっと少ない。もっとも、実際のところ、この一世紀ぐらいの間にバソガのクランがいかなる変化を受けたかということについては、何も明確にはわかっていない。クランが農村部で現在でも、社会生活のあらゆる側面できわめて重要な役割をもっているということだけははっきりしているが、現在行なわれている制度や慣習が 50 年前あるいはそれ以前と同じであったという保証はないし、実

注1 ムラタ首長、キソコ首長の現在の社会的地位については、中林、1975、"首長と農民——バソガにおける近隣関係"『民族学研究』40 巻 2 号参照。

際、変遷があったことをうかがわせる形跡は多い。

ここでは、こうしたクラン制度の歴史的変遷が主題ではないのであるが、しかしこれから扱かうことは、クラン制度にまったく新しく導入された事柄である。それは、クランの人々の系譜や名前を記録し、彼らが守るべき規則や義務を書きこんだノート類、いわゆる「クラン・ブック」である。

海岸地方を別とすれば、東アフリカにアルファベットが組織的に入ってきたのは、他の西洋の文物と同様、19世紀末である。そして一般農民の少なくとも一部がこの文字を使いだすまでには、おそらく何十年かを要したであろう。筆者のごく大まかな推定では、現在40才以上の村の中の男たちは、五人に一人程度が字が読める。しかし若い世代は、小学校教育がそうとう普及したので、三分の二程度の者が字を読めるだろう。

彼らの書きことばは、彼ら自身の言葉である *Lusoga* ではなくて、隣りの有力な部族バガンダの言葉である *Luganda* である。いずれにしても、ルガンダはルソガに非常に近い言葉である。文字使用は、今では、村の中の生活でも不可欠になっている。手紙、各種の契約書、貸借・売買の証書、遺書などがその代表的な例である。

クランブックがつくられる背景には、すでにこのような文字使用の習慣がある。クランブックがひろくつくられるようになった時期については未調査であるが、これから分析するクランブックは1943年につくられた。約30年前のことである。とにかく現在では、クランの組織のあるところには、必ずこの記録があるといってよいほど、広く普及した風習になっている。

以下、このクランブックに、何が記されているか、それを分析して何が分るか、それがクラン制度に対して持っている意味は何か、といったことに触れてみたいと思う。その前に、まずバソガのクランについて、概略をのべなければならない。

クランのことを、ルソガではエキカ (*ekika*) という。この *ekika* という言葉は、その他に「種類」というふつうの意味を持っている。クランにはそれぞれ特有のトーテムがある。これをオムジロ (*omuziro*) といい、殆んどすべて、けもの、鳥、魚、昆虫、草木などの動植物である。自分の属するクランのトーテムを殺したり、食べたりすることは禁じられていて、もしそうすれば、皮膚の表面がはげたように白くまだらになると信じられている。トーテムに対するタブーは未だにおとろえていないが、しかし、ライオン、象、ハイエナなどをトーテムにするクランの人々にとっては、実際にはこれらの動物がすでに附近に存在しなくなってしまったことによって、タブーは意味を持たなくなったということはある。

クランの始祖や遠い時代についての神話や伝承などは非常に限られている。彼らは5・6代前の先祖より前のことには、ほとんど関心がないのである。

クランは厳密な外婚の単位である。まったく見ず知らずの男女でも、同一のクランに属していることがわかれば、結婚することはできない。一般的にいて、同じクランに属し

ている二人の人は、互いに父系の系譜をたどって共通の祖先にまで到達することはできない。しかし彼らは、お互いに父系的に結びついているはずだという、莫然とした信念はもっている。したがって、同じクランに属する男女の性交渉も、直ちに恐るべき結果がくるとは考えないが、一種の近親相姦 (ekitalo) として、好ましいものではない。<sup>(注2)</sup>

バソガの親族名称は、クランの成員全部に拡大適用される類別式である。したがって、ある男にとってクランの成員は、性別とおおよその世代の違いによって、次の八つのうちのどれかにあたる。すなわち、“祖父”か“祖母”(いずれも *dhadha*)、“父”( *lata*) か“おば”( *songa*)、“兄弟”( *muganda*) か“姉妹”( *mwanhina*)<sup>(注3)</sup>、“息子”( *mutabani*) か“娘”( *omughala*)、あるいは“孫”( *mwidhukulu*) である。

こうしたクランの成員と、実際に日常生活で出会った場合、人は彼を、この名称に相当する血縁者に要求される尊敬、歓待、親愛などをもって、待遇しなければならない。もしこれを怠って、あたかも単なる知人のような待遇をする人は、クランの成員をその関係の近い遠いで区別する人(こういう人を *omubooze* という)として非難される。

しかしこれはあくまで一般的な道義やたてまえであり、おもむきの原則である。現実には、系譜関係の有無、系譜の遠近の程度、そして後述する二、三のファクターによって、成員間には法的、道徳的、儀礼的な権利義務関係に程度の差がもちろんはっきりと存在する。

クランの内部は、ある特定の祖先を共有し、お互いに父系の系譜によって実際に結びついている人々の集団、すなわちリネージによって細分化されている。これを彼らの言葉ではエンダ (*enda*) という。エンダは大きいもので、6～7世代の深度をもっている。それはさらにその中がいくつかの小さなエンダに分かれている。最小のものは三代代であり、これがリネージとしての結合、あるいは *corporateness* の度合がもっとも高い。

エンダはそれぞれ、その頂点に立つ先祖の名前をとってよばれる。例えば、キワヌカという男を共通の先祖とする人々のエンダを “*enda ya Kiwanuka*” とよぶ。つまり “キワヌカのエンダ” という意味である。

このリネージが、バソガの氏族制度の中核的な組織であることはいうまでもない。その成員は原則として特定の地域に集中して住み、法的な権利、義務、あるいは儀礼上の義務などを互いにもっている集団である。そして、外部の人々からは、ひとつの単位として、社会的人格を付与されているような集団である。

バソガのいわゆるクランブック——彼ら自身、“*ekitabo eky'ekika*” すなわちエキカの本あるいはノートとよんでいるのであるが——を記録し所有しているのは、実はこうした

注2 バソガの *ekitalo* については、中林、1974、“バソガの姻族と結婚”『民族学研究』38巻3.4号 p.227-9 参照

注3 正確にいうと *muganda* は同性の類別的キョウダイ *mwanhina* は異性の類別的キョウダイである。

エンダである。それも5, 6世代の深度をもったリネージであるのがふつうである。

クランブックの内容というのは、後にみるようにほとんどこうしたリネージについての事柄である。それでは、クランブックが、クラン全体とは無関係かということ、そうでもない。やはりクランにおける、それぞれのリネージの所有するクランブックの位置というものがある。

バソガの人口は約47万人(1959年センサス)、それに対してクランの数は150~170あるといわれている。これは、36のクランしかないという隣りの部族であるバガンダに比べて、かなり大きな数である。ただこの中には、トーテムを同じくするクランが多数含まれている。これらはおそらくひとつのクランが細かく分裂した、どちらかといえば特殊なクランで、こうしたものがクランの数を多く見せているらしい。

バソガの人口を、そのクランの数で割る単純な計算をすれば、ひとつのクランの成員は約3000人という結果になる。しかしふつうに存在しているクランはもう少し規模が大きいように思える。ただバソガのクランの数や規模、分布、クランどうしの関係、他の部族のクランとの関係などがまだほとんど調査されていないので詳しいことはわからない。いずれにしても、クランの成員は広い範囲にわたって居住しているので、人は自分のクランの人数や分布について詳しいことを知らない。

ところが、それぞれのクランは、ブソガ全体をカバーするような非常に広範囲にわたる自治的な組織を持っているのである。その組織というのが、ブソガの現行の行政組織をそっくりコピーしたものであることがおもしろい。すなわち、ブソガ地方政府の行政上の地域区分にしたがって、それぞれのクランが数段階に分かれる独自のリーダーあるいは首長を置くというものである。<sup>(注4)</sup> 彼らは種々の段階でクランの会議を開き、成員の間の争いや相互扶助の問題を討議する。そうしたことを実施するために、各クランは独自の規則(amateeka)も持っている。

こうしたクランの組織は、比較的最近発達したものであることは明らかであるが、それがどのような理由で、どのような過程をたどって成立したかは未詳である。

ひとつははっきりしておかなければならないのは、このクランの自治的組織と、クラン内部の本来の組織であるリネージ制度とは、相対的に独立したものであるという点である。今のべたクランの首長たちは、何らかのリネージを代表しているのではなく、クランの住民を行政区分に從がって地域割りにした時の、地域代表者として選ばれた人々にすぎない。

しかしもちろん、こうした首長は末端でその地域のリネージと接触しているわけである。そしてクランブックもまた、この接点に存在していると考えることができる。それは、ク

注4 それらはふつう次のような首長を含む。まずブソガ全体のクランの責任者を Kyabazinga という。以下 Saza 首長, Gombolola 首長, Muluka 首長, Mutala 首長, Kisoko 首長などが存在する。Kyabazinga は地方行政上の地位としては、すでに廃止された。その他の首長の名称は、現在の地方行政組織、あるいは準行政組織における首長のそれと全く同じである。

ランブックを持っているのが、バソガにとっては最大規模のリネージにあたるものであること、クランの *amateeka* が、しばしば各リネージのクランブックに控えられていることなどによっても明らかである。おそらく、クランブックが書かれるようになったことと、クランの自治組織が整備されていったこととの間には、深い関係があったに違いない。というのも、両者ともに伝統的なクラン、リネージ制度の、現代における社会変化への対応形態だからである。

## 2 カルヤのリネージとクランブック

1971年6月、筆者が Namwendwa Sub-County (Bugabula County) に住みついた時、集中して調査するための場所のひとつとして、あるキソコを選んだ。そのキソコの名前をブルヤ (Buluya) という。この名前は、キソコの最初の首長の名前、カルヤ (Kaluya) に由来している。彼はオムヴレ (omuvule) というあだ名をもっていたが、これはこの地方で雄大な姿をした一種の木のことで、それから得られる材木は強く、白蟻や腐蝕に強いことで知られている。このあだ名の意味するところは、カルヤが勇敢で立派な戦士であったということである。彼がキソコ首長であったというのも、かつて存在した Bugabula の王に功績を認められて、この地を支配領として与えられたからに他ならない。

カルヤは現在のクランの中心をなす世代 (50~70 才) の曾祖父にあたる。このことから推測して、カルヤが活躍していた時代は 80~90 年前であろう。

彼の属するクランは、ハイエナ (mpiti) をトーテムにする AbaiseMususwa である。このクランに属する人を Mususwa (複数は Basuswa) という。<sup>注5)</sup> ブルヤの住民は、このバススワの世帯が中心であるが、しかしそれ以外のクランに属する人々の世帯もある。これらは、代々のキソコ首長によって、ここに土地を与えられ、住みつくことを許された人々の子孫の世帯である。あるいは、現在では土地が売買されるので、単に土地を買って入ってきた人もいる。

ブルヤの基本的な社会構成を知るために、筆者はまずバススワの系譜を採取しようとしたが、これが思ったほど簡単ではなかった。数人を尋ねてみてすぐ気付いたことは、彼らがあまり長い系譜に関心がないということであった。祖父の名前までは覚えているが、その上の代になるともう知らないという人が多い。そして、自分の直系については確かだが、傍系に入るとたとえ名前を知っていても、実際の系譜関係となるとあいまいになったり、あるいはまったく誤っていたりする。その結果、聞く人ごとに系譜関係が違っているということになり、バススワの信頼のおける系譜をつくることに著しい困難を感じたわけである。

注5 すべてのクラン名の最初の部分は Abaise である。これには「父親たち」といった意味もある。

彼らが、自分たちのエンダの実際の系譜関係を正確に知らないということには、類別的名称の使用が大きな作用をしている。人々の信じている系譜でもっとも多い誤まりは、実際はいとこあるいはそれ以上の傍系にあたる人々を、“本当の兄弟”（つまり同一の父親をもつ兄弟）だと思いこんでいることであった。これは彼らの“muganda”が直系と傍系の同世代の人を区別しないことに大いに関係しているだろう。

しかしこの点は、クラン・リネージ制のもっと根本的な性格にかかわっていることを見のがせない。それは前述した omubooze の問題である。即ち、同じクランのメンバーの間で、系譜関係の遠近をとりたてて強調したり、あるいは実際に差別するような行為を公然と行なってはならないという道徳的規範の存在である。

具体的に言えば、系譜を採取しようとした時、人々が特に神経質になったのは、ブルヤ内部のバススワのエンダを区別することであった。相手が筆者一人の時はまだよいが、クランの仲間がそばで聞いているときなどは、質問をはぐらかされた経験がある。またある人から、カルヤのエンダの内部構成を教わった後で、“enda ya Kaluya ndereere”つまり「カルヤのエンダはひとつだ」と念を押された経験もある。このように、ひとつのリネージが内部はさらに細かくわかれていることは厳然とした事実であるが、外部に対しては、そのリネージが全体としてまとまっていること、ひとつであることが常に規範的に表明されなければならないのである。

この点をもう少し詳しく述べれば、こうした規範が適用されるのは、祖先を同じくする人々によって構成されるエンダだけではない。系譜的には全然つながりがなくても、同じキソコに住んでいる同一クランのメンバーについても、この道徳的規範にあてはめられる。しかし、同一クランでありながら、キソコが違くと、人々はためらわずにエンダが別であること、つまり系譜関係がないことを認める。こうした人々の間には、同一クランの成員であるという一般的関係以外には、たとえば互いの葬式に出席するといった特定の義務は何もない。他方、同じキソコに住む、系譜関係のない同一クランの成員は、前述した理由により、その事実を言うことには慎重である。ブルヤのバススワにも、実はエンダ・ヤ・カルヤ以外の、断片的なエンダがいくつか存在していたのだが、筆者が最終的にそれを確認できたのは、結局クランブックに彼らの名があがっていないことを確かめた後であった。

こういうわけで、人々から聞いたバススワの系譜が誤まりだらけだったことには、単なる無知とか作為以上の、クラン・リネージ制度そのものにかかわる問題がからんでいたのである。

クランブックはしたがって、正確なバススワの系譜やリネージの構成を知るという点で、実に有用な記録であった。

このクランブックは、一冊の数十頁からなるノートブックを用いたもので、実際に文字が書かれているのはそのうちの20ページほどである。白紙の部分は、後から追加の記入が

予定されていることは明らかであった。

その冒頭には次のような文字が記されている。

- (i) Namwendwa Isingo 26/9/43                      nze William Kaluya  
 (ii) Ekitabo kino Ekyekika Enda zombi Bwezisikagana Mululyo

(i)はこのキソコの所在地と、ノートをつけた日付け、ノートの所有者の名前である。Isingo というのはブルヤが存在しているムタラの名称である。ウィリアム・カルヤというのは、初代のカルヤからかぞえて四代目の直系の相続継承者である。1943年9月26日という日付けは、この記録をつけた日にちがないが、おそらくこの時、カルヤのエンダのおもな人々が集まって知恵を出しあったのであろう。

(ii)はこのクラン・ブックの目的を簡潔に書いてある。「この本(ekitabo, ノートでも同じ)はクラン(ekika 前述)の本である。二つのリネージ(enda 前述)が親族の間で(mululyo)互いに相続し合う時の」と読める。ここで問題は相続し合う(—sikagana)の内容である。

このクランブックは、エンダ・ヤ・カルヤ内部のいくつかのリネージおよびそれに付随的なリネージの間で、お互いの“相続者”を明らかにしておくためにつくられた。相続者のことをバツガは、オムシカ(omusika)という。ところが omusika には二種類あって、その一を omusika ow'amaka, その二を omusika ow'enbisi という。

第一のものは(以下 ow'amaka という)死者の財産、政治的公職(世襲的首長職など)を相続し継承する者である。これはふつう死者の息子の中から選ばれる。それも遺言で決められていることが多い。<sup>(注6)</sup> 第二のものは(以下 ow'enbisi という)財産とか公職には全く関係しない。このオムシカの役割は、時に応じて死者の子どもたちが行なう儀礼に責任をもつことだけである。彼は死者の上着とズボンを受けとる。この象徴的な相続物は、死者の父親としてのステイタスが ow'enbisi に継承されたことを表わしている。実際に、このオムシカは、死者の子ども達からは“父親”(lata)とよばれる。しかし彼は死者の子どもの養育、監督その他いっさいの実際的なめんどろを見る義務はない。つまり彼は法的な後見者でもなければ養育者でもない。ただ彼らの霊的保護者として儀礼に関係するだけである。この点については、後にもう少し詳しく触れる。

このクランブックにおけるオムシカというのは、すべてこの第二のもの、すなわち ow'enbisi を指しているのである。したがってこの場合のオムシカというのは「相続者」よりも「継承者」の方が適切である。クランブックは、(ii)の文章にあらわれているように、ow'enbisi の選び方を具体的に述べるのが最大の目的なのである。それは、後にみるように、あるリネージの成員にもうひとつのリネージの成員によって継承されるというように、二

注6 omusika ow'amaka とは amaka の相続者という意味になる。amaka とは夫と妻(複数の場合もある)とその未成年の子どもたちからなる世帯を典型とする居住集団である。

つのリネージの関係としてあらかじめ設定されている。(iv)の文章にある「二つのエンダ」とか「相続（継承）し合う」といったことばはそうしたことを指している。

このクランブックの本文に入ると、その最初に再び簡単な前書きがある。それは、

(v) Okulongosa ekiramo mululyo lwenda yafe mukika

「クランにおける我々のリネージの親族の間で、遺志 (ekiraamo) を明らかにするために」というような意味である。

ここで ekiraamo というのは、死者の遺志とか遺言を意味する言葉であるが、このクランブックの場合は、owenbisi の選び方に関するそれであることは、これ以下の記述によってあきらかである。ただこの「遺言」が Kaluya というような特定の個人の遺したものであるかどうかは詳びらかにしない。

以下は人の名前をあげた具体的記述になる。

(=) Omwana wa Cyuka ye Kaluya

「チューカの子どもはカルヤである」

とまず、カルヤの父親の名前が出てくる。ついて、

(+) Kaluya nazala bebano :

- |            |          |              |
|------------|----------|--------------|
| 1 Musubira | 2 Kijiki | 3 Nguluka    |
| 4 Musirike | 5 Musiru | 6 Nanimulese |
| 7 Ndilo    | 8 Baveno | 9 Bawaile    |
| 10 Mukoba  |          |              |

「カルヤはこれらの子どもを生んだ (—zaala)」(—zaala という動詞は女にも男にもつかう) として、10 人の子どもの名前を書きあげている。これには生まれた順に番号がつけてある。またこれらの子どもはすべて男子で、女子は書かれていない。以下の記述もすべて男だけである。これはもちろん、彼らの父系出自の原則と、omusika は男についてのみ行なわれる制度であることによる。

ここに上げられたカルヤの 10 人の子どものうち、子孫ができなかった 3 人を除いた 7 人は、エンダ・ヤ・カルヤの内部にそれぞれ彼ら自身のエンダをつくった人々である。このクランブックの記述の中心は、こうしたエンダにある。たとえば、カルヤの二番目の子キジキについてみると、



## (㏽) Bano bebana ba Kijiki omwana wa Kaluya.

- 1 Kumusegwawe
- 2 Thibata
- 3 Kabanda
- 4 Musekwa
- 5 Kiwanuka

Bano bebaana ba Kijiki bebasikira abaana ba Musubira.

「これらはカルヤの子キジキの子どもたちである」として、5 人の名前をあげ、「これらキジキの子どもたちはムスビラの子どもたちによって相続される」。

これからわかるように、このクランブックでは、Aの子どもたちはBの子どもたちによって継承される、というように、同一の父親をもつ子どもたちをひとまとめにして、owenbisi による継承関係を指定しているのである。これはこの制度が集団的だからではない。現実の継承する者とされる者は一対一なのである。これは、クランブックが継承関係の原則だけを示し、実際の owenbisi は葬式の際に選ぶというやり方をとっていることによる。

この(㏽)の例文は典型的な記述であるが、次のような例も少数ある。

## (㏾) Wambi omwana wa Thibata kunda ya Kijiki yalisika Muyaye omwana wa Kaluya kunda ya Musubira.

「キジキのエンダのティバタの子ワンビは、ムスビラのエンダのカルヤ（もちろん始祖のカルヤとは別人）の子ムヤヤエを継承するであろう」。

これは特定の個人の名をあげて、継承する人とされる人を指示している点で、(㏽)にみられるやり方と少し違う（もっともワンビの方は一人息子であるので特定されるのは当然であるが）。なおこの文では「継承する」という動詞が明瞭に未来を示している（—lisika）。

このクランブックには(㏽)(㏾)のように、父・息子関係とともに owenbisi の継承関係も明らかにした項目は37 あった。その他の約39 項目は、(㏽)のような形で父親とその息子の名前を上げただけのものである。これはおそらくこのクランブックの記述が未完成であることを示すものである。それは、これらの項目のうちに次のような文章がつけられていたものがあつたことによってもうかがわれる。

## (㏿) Bano tetumanyi alibasikira kiribuzibwa

「これらの子どもたちが誰によって継承されるかわれわれは知らない。間合わせられるであろう」。

なお、(付)におけるカルヤの息子 7, 8, 9 について、わざわざ彼らに子どもがなかったことが述べられている。例えば

(リ) Dilo omwana wa Kaluya teyazaala.

「カルヤの子ディロは子がなかった」。

以上、このクランブックの内容の特徴を述べてみた。これを整理することによって得られるものは、第一にカルヤのエンダの全容（実はその他のエンダも含まれていたが）、第二にその成員の間での *owenbisi* による継承関係の二つである。前述したように、第一のものだけでも、このブルヤの社会を知るためのきわめて重要な基礎資料であることはいうまでもない。第二のものについては、ここでもう少し分析を進めてみたい。

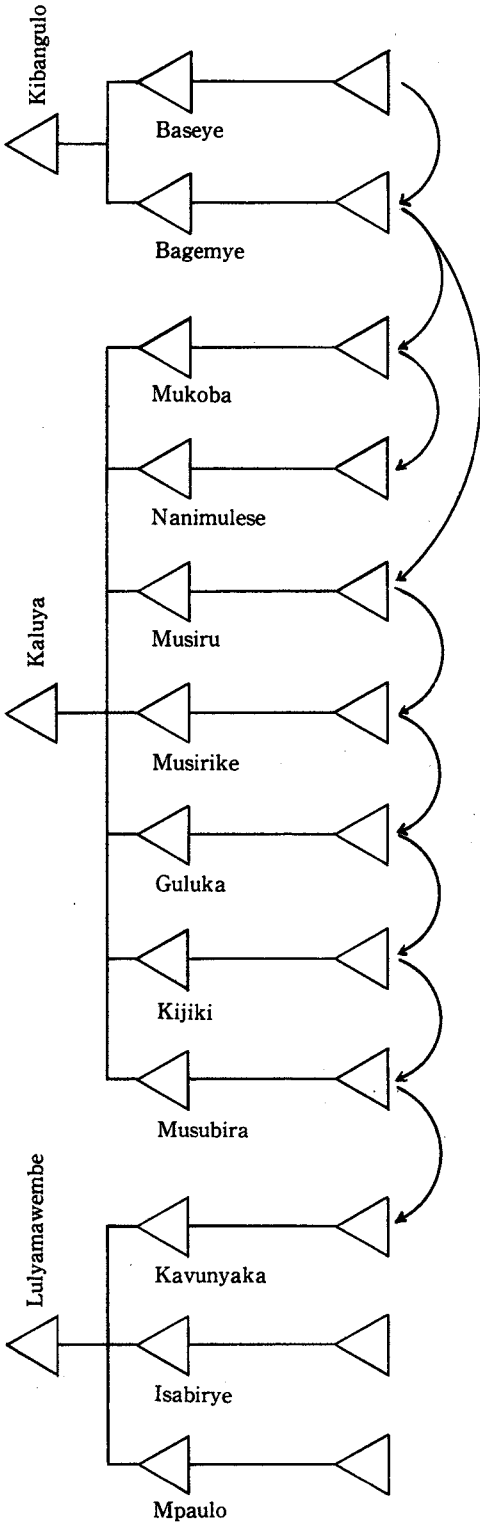
### 3 Owenbisi 制度

このクランブックから得られる *owenbisi* の継承関係の知識は不完全であるだけでなく、しばしば不規則にみえる（あるいは筆者にとって理由不明の）継承関係があることで、残念ながら分析も細かい点までは行きとどかない。以下に述べるのは、第一に、相互に継承関係にあるリネージはエンダ・ヤ・カルヤ内部のものだけでなく、その他のリネージを含み、全体としてひとつのグループを形成していること、第二に、それらの間に特定の継承順位があること、第三に、*owenbisi* 制度がリネージ制に対してもつ意味、の三点である。

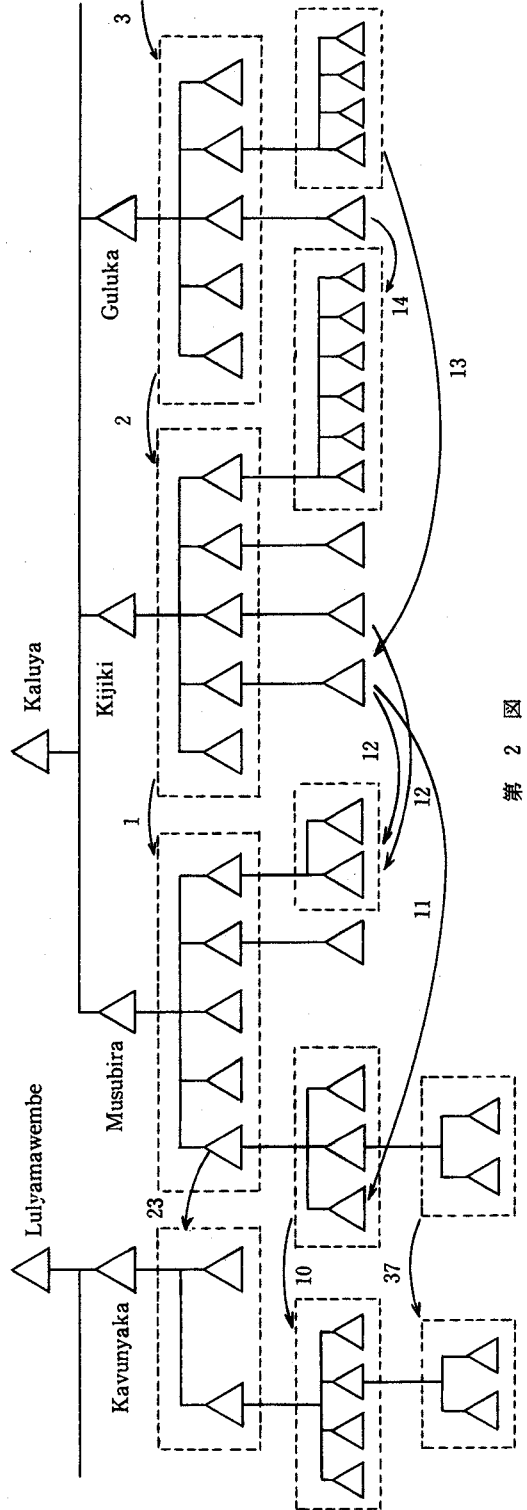
第 1 図はクランブックの最初の方に出てくる継承の実際を図示したものである。これによって第一点、第二点を簡単にみることができる。中心にカルヤのエンダがある。それはカルヤの息子たちによってつくられた七つのリネージに分かれている。(c.f. 文例(付))。クランブックはこれらのリネージの二世代目の人々の間で、どのような継承をすべきかをのべているわけである(c.f. 文例(ハ))。第 1 図は *Musubira* たちの次の世代を一人で代表させ、その継承関係を矢印で示したものである。すなわち *Kijiki* の子ども(たち)から *Musubira* の子ども(たち)へ向かっている矢印は、前者が後者を継承することを示している。

クランブックを整理してはじめて気がついたのは、エンダ・ヤ・カルヤ以外の、今まで聞いたことのなかった人々の名前が相当数書きこまれていたことである。これらの人々の父子関係をつなげてみると、第 1 図にその一部がみられるような、*Lulyamawembe* および *Kibangulo* という名の始祖をもつ二つのエンダが現われた。その継承関係からみても、この二つのエンダは、エンダ・ヤ・カルヤと対等の資格をもっていることがわかる。

この二つのエンダの正体はあまりはっきりしたことはわからなかった。詳しいことを知っている人が少ないのである。というのも、この二つのエンダの中心は、別々に、いず



第 1 図



第 2 図

れもこのブルヤからは数十キロ離れたところに所在しているのである。一体どうして、系譜関係もなく、居住地も離れているエンダの間で、owenbisi<sup>-</sup>をお互いに出し合うのが当然疑問になる。

これには二つの推測ができた。その一は、これらのエンダの人々がかつてブルヤの付近に住んでいたという報告を得たことによる。そうであれば、カルヤとこの二つのエンダの始祖たちの間に特別の盟約などがあったかも知れない。その二は、これら三つのエンダをもっと遡れば、共通の祖先に達するのかも知れないということである。しかしそう主張した人も、実際の系譜は知らない。

いずれにしても、カルヤのエンダと他の二つのエンダは、日常生活の上では全くといってよいほど交渉がない。ただひとつの例外は、ブルヤに Lulyamawembe のエンダに属する二人の男がいることである。彼らがここにいる理由も、owenbisi 制に関係がある。最初にブルヤにやってきた彼らの祖父は、ブルヤのあるムススワが死んだ後、その妻を“相続”する際にこちらに移住してきたというからである。未亡人との結婚というのは、owenbisi が必ずするというのではないが、owenbisi<sup>-</sup> 制で結びついているリネージの男の“兄弟”が行なうのが原則である。

ブルヤには、カルヤのエンダ以外に、それに付随するように他所から入ってきた、小規模なバススワのエンダが四つあるが、カルヤ一族とこの二人とのつき合いは、あきらかに他の三つのエンダの人々にくらべて密接であった。これはいうまでもなく、“お互いに相続、継承し合う” (—sikagana) エンダどうしの関係は、たとえ共通の祖先にまで系譜がたどれなくても、近い関係にあるのである。

エンダ・ヤ・カルヤは、バスガのエンダつまりリネージの形態からいうと、これ以上大きなリネージに属していない最大規模のリネージにあたる。それは世代の数でいえば、5～6世代の深度をもつたリネージである。owenbisi 制は、後に詳述するように、この規模のリネージに特徴的な制度である。実際に、このような規模のリネージひとつの内部で自足的にこの制度を実行している例は多い。しかし、このカルヤのクランブックの示すところは、最大規模のリネージが複数集まって、owenbisi による継承関係をもつグループを形成することがあるという事実である。

検討すべき第二点は、owenbisi の継承に特定の順があるという事である。これは第1図でも明らかなように、カルヤの息子たちによってつくられたリネージを単位として行なわれ、あるリネージの死者は、ひとつ隣りの“年少”のリネージから出される owenbisi によって継承される。

こうした点をもう少し詳しく見るために、カルヤとルリャマウエンベのエンダの一部を、クランブックの記述にそって図示したのが第2図である。矢印についている数字は、継承に関する項目がクランブックにあらわれる順に便宜的につけたものである。同一の父親を

もつ息子たちが破線で囲ってあるのは、クランブックにおいて彼らがひとまとめに扱われていることを示す。したがって、1～3は第1図にあらわれていたものと同じである。

この第2図からわかるように、このクランブックは第二世代（第1図）についても不完全であるが、第三世代の継承関係についてはもっと非組織的で、名前だけあげて継承関係が全然ふれてなかったり、あるいは継承する方がされる方の一方しか書かれていなかったりしている。

それでも、これらの図（特に第2図のカルヤのエンダの部分）から、owenbisi<sup>-</sup>の継承についてのいくつかの原則は明瞭に読みとることができる。すなわち

- a) 三世代の深度をもつリネージがひとつの単位として継承関係が設定されている。ただし現在の時点でいえば、このリネージは成長してすでに五世代の深度をもっている。このリネージは、最大規模のリネージ内部を区分している一段階下のリネージにあたる。
- b) この単位のリネージ間には、owenbisi<sup>-</sup>を出す方向がきまっている。それはこのリネージの創始者の出生順によるもので、owenbisi<sup>-</sup>は順に年少の傍系リネージから出される。
- c) その owenbisi<sup>-</sup> は同世代から、つまり類別的兄弟から選ばれる。
- d) 継承し、継承される関係は、同一の父をもつ息子たち全体をひとまとめにした関係として、予め指定されている。特定の死者の owenbisi に誰になるかは、そのつど決められる。

この点にひとつつけ加えておくことがある。それは omusika ow'enbisi と並んで、omusika ow'enkalu という継承者が同時に決められる習慣になっていることである。この owenkalu のというのは、owenbisi が死んだとき、それに代わって自らが owenbisi になる、いわば予備の owenbisi である。彼は owenbisi に準じて選ばれ、死者のシャツを受けとる。<sup>(注7)</sup>

さてここで、owenbisi 制についての第三点、つまりそのリネージ制度にたいしてもつ意味について考えてみる。

すでに述べたように、owenbisi が死者から受けとるものは象徴的な意味をもつ上着とズボンだけで、実質的な財産、オフィスの相続・継承には関係がない。彼は死者の父親としてのステイタスを継承するが、法的な保護者としてのそれではなく、儀礼上の保護者としてのそれである。すなわち owenbisi は、死者の子どもたちがある種の精霊の儀礼を行なうときに、相談を受け、そして実際に参加することが、その主な役割なのである。

そのその代表的な儀礼が、ルバーレ (Lubaale) とよばれる精霊のための儀礼である。このルバーレという精霊は、この地方の数ある精霊のうちのひとつであるが、特にリネージ制度と深い関係がある。ふつう五、六世代の、ここでは最大規模のリネージは、それぞれ

注7 これらの名称の語根部 —bisi, —kalu は、いずれも形容詞として用いられると、前者は“生の”とか“未熟の”という意味があり、後者は“乾いた”という意味がある。

独自のルバーレを保持し、その社祠をもっている。そして時々 enfumu とよばれる儀礼を行なわなければならない。というのも、人が重い病気になった時、しばしばそれがこのルバーレの作用であるということにされるからである。病気を契機にして、占い者 (omulaguzi), 呪医 (omuigha) に接触し、ルバーレを含むこの地方の諸精霊 (emisambwa) の儀礼を行なうに到る、というのが、この地方の人々 (大部分はキリスト教徒であるか、そうであることを自認している) の伝統的宗教・儀礼体系へ接近する、もっとも普通のコースである。この伝統的な、宗教・儀礼体系には、その中心に Abaswezi とよばれる、結社的な結合をした信者たちがいる。彼らは emisambwa の諸儀礼をとりしきる祭司であり、またその儀礼に不可欠な霊媒でもある。複雑なルバーレ儀礼を理解するには、一方ではこの Abaswezi の説明が必要になる。

しかしここでは、この儀礼において果す owenbisi の働らきについてだけ簡単にのべることにする。もちろん彼は儀礼の間 Abaswezi の指揮下にいる。そして、昼夜をとわず太鼓をたたいてルバーレを呼んだ結果、ついに霊媒あるいはその他の人々に霊がつくという儀礼のクライマックスで、owenbisi は犠牲獣 (ふつうは山羊) の脚をつかんで、ルバーレに祈願の文句をのべるのである。その直後、獣は殺される。

owenbisi をさきに「霊的保護者」とよんだのは、ここに見られるように、死者の人格のうち、子どもをリネージの神格に結びつける媒介者としての父親の地位を、彼が継承したことを指したのである。owenbisi が「霊的保護者」になりうる根拠は、いうまでもなく、彼と死者が共通にもっている、特定の祖先にたいする父系の出自である。owenbisi が、彼の死んだ類別的兄弟の子どもの「霊的保護者」であるということは、したがって、両者のあいだにある父系出自を媒介にした関係の、ひとつの象徴的な表現であるとみることができる。

こうしてみると、owenbisi と owamaka とは、きわめて対照的なオムシカであることがわかる。

まず owamaka による相続・継承の主要な根拠は、父と一人の息子の間の親子関係である。死者に息子がいなかった場合でも、owamaka の選出はせいぜい三世代のリネージ内部の問題である。一般的にいて、少なくとも現在の Namwendwa では、財産の保有、処分を中心とするリネージの協同性は著しく低い。それらは、独立した世帯をもつ成人男子 (すなわち amaka の主人) の自由な裁量のもとにある。こうしたことから、誰が owamaka に選ばれるかは、同じ父親をもつ兄弟の間の重大な関心事であり、決定の仕方によっては彼らの間に緊張と分裂をもたらす。

特に現在のように、土地 (耕作地) に余裕がなくなると、父親の相続者でないということは、どこかよそに土地を得て (自分で働らいた金で買うことも多い)、生まれ育った自分のリネージのある土地から離れなければならないことを意味する。ブルヤに於ても、ほと

んど常に父親の「最愛の息子」(omwende) が owamaka になって残り、それ以外の息子は、全部ではないまでも、大部分は祖先からの土地を去って遠くの場所に移住し、そこに自からの世帯をつくる、というパターンをはっきり見るのことができる。カルヤの息子でブルヤに自からのエンダを形成した七人には、現在彼らの孫および曾孫の世代を中心に多くの子孫がいるのだが、そのうちブルヤに土地をもって世帯があるのは約 14 人にすぎない。他のものは他所に出ていってしまったのである。

このように owamaka というものが、基本的にリネージ内の分離、分裂を促がすものであるのに対し、owenbisi は、分岐したリネージを結びつける働らきをもつことは明瞭である。owamaka がアマカと親子関係に基礎があるのに対し、owenbisi が何よりもリネージ制と出自に特有な制度であることがその基本的な理由である。

最後に、この点に二、三注釈を加えてみる。まず、owenbisi 制とバソガの最大規模のリネージの相互依存的な関係がある。前述したように五、六世代のリネージというのは、財産やオフィスの保有という点では、ほとんど協同性がない。そのうえ、その成員は各地に分散する傾向がある。owenbisi 制はここにおけるほとんど唯一の協同的性格をもつ制度なのである。owenbisi 制は、この規模のリネージの存在に不可欠であるといつてよい。これをいいかえて、彼らの最大のリネージというものは、owenbisi によって継承される関係で結びついている範囲である、としてもよい。(もっともこの逆に、owenbisi 制で結びついていれば、その範囲が最大のリネージということは必しも成り立たない。複数の相互に系譜関係のないリネージで owenbisi 制を実施しているグループがあるからである)。

owenbisi によるリネージの結果は、基本的に儀礼的凝集力に依存するものである。ルバーレ儀礼の顕著な特徴は、owenbisi がこれに参加しなければならないだけでなく、リネージの成員のすべてがこれに参加しなければならないことである。ルバーレ儀礼は、この強制力によって、ふだんはあまり交渉を要求されない最大規模のリネージの成員に、その存在を知らしめる。ただ、キリスト教の影響でこれへの参加を拒否する人もおり、この儀礼が行なわれるたびに、リネージ内に深刻な紛争が起る、というのが現代的状況である。ルバーレ儀礼への強制的参加ということは、裏がえしてみると、同じキソコ内に居住している系譜のつながっていない同一クランの成員を排除し、区別することである。クラン成員の間に区別をつけてはいけないという、一般的で拡散的な道徳はここでは否定されている。

こうして、owenbisi 制度は、一方でリネージ制度そのものを基礎にし、他方ではバソガの伝統的な儀礼体系の一部に組みこまれている。前者はさらにクラン制度一般を背後にもち、後者は Abaswezi を中心とする広大な宗教的・儀礼的領域に必然的に結びついている。owenbisi 制はこの二つをつなぐ結節点として、特異な位置を占めていることは、特に指摘しておかなければならない。

リネージの結束という点で、クランブックの存在そのものも見逃せない。ここでとりあげたクランブックが書かれた1943年におけるエンダ・ヤ・カルヤの状況を推定してみるとこうである。カルヤから数えて四代目の直系の相続者であるウィリアムはこの時およそ35才である。このころはちょうどカルヤの息子たち（ウィリアムの祖父の世代）がだいたい死んでしまったか、あるいは60～70才の老人として少数が生き残っていた時期であろう。いいかえれば、カルヤを頂点にした三世代の深度をもつリネージが実体を失ない、数多くのカルヤの孫を頂点とする三世代のリネージが自立しはじめた時期である。

こうした時にクランブックを作るということは、そのままでは分散し、ついには互いに忘れてしまうであろうエンダ・ヤ・カルヤの人々を、記録することによってお互いの関係を保ちつづけようとしたと考えることができる。成員の名前だけを書きあげるだけで満足し、owenbisiの記載がない項目があるのもそのためであろう。

この点で興味あるのは、このクランブックに実は、3ページ27項目にわたる“abakazi”つまり「母親たち」の名前とその出身のクラン名が書きこまれていることである。これはカルヤの息子たちの母親たち（つまりカルヤの妻たち）と、その下の世代の母親たち（つまりカルヤの息子たちの妻たち）についてだけであるが、これなども、このクランブックが、エンダ・ヤ・カルヤ全体にかかわる事柄を記憶するためのものであることを示している。

文字使用（クランブック）と儀礼（ルバーレ儀礼）とは、このように単に機能が同じという以上に、リネージそのものの記憶装置とでもいえるような、よく似た性格を見せているのも注目される。

ところで、omusika ow'amaka と omusika ow'enbisi による二重継承制ともいうべき方式は、通時的観点からみても興味ある問題が含まれているようである。残念ながら筆者はこの点については資料をもっていないが、L. A. Fallers (*Bantu Bureaucracy* 1956) の記述の中にこういうところがある。死者の相続、継承者が、財産の相続者と「血縁上の役割」の継承者の二人に分けられたのは、19世紀末のバガンダの影響によるものだということを“すべてのバソガ”が認めているというのである。<sup>(18)</sup>

注8 同書 pp.90-91. 彼はこの本の中でバソガの相続形態についてかなり詳しく述べている (pp.86-95). それが筆者の調査によるものといくつかの点で異なるので、それを簡単に指摘しておこうと思う。この違いは、ひとつには調査年代の違いにもよるであろうが、調査地の違いが大きいようである。Fallers は Bulamogi County の南東部 (Namwendwa の東 30 km) と Kigulu County の南東部 (Namwendwa の南東 45 km) の二ヶ所を調査している。この二つの場所では、言葉や慣習にかなり違いがあるはずだが、彼は区別をせずにバソガ一般のこととして述べている。(しかし、多分後者の資料によっている。)

彼の報告も、二重継承制ともいうべき形態である。しかし名称がまず違う。死者の財産の相続者は “musika atwala ebintu” という。これは文字通りにいえば「品物をとる相続者」ということになる。他方、死者の子どもたちの保護者となる相続者は、“musika owenkoba” 「帯の相続者」という。これはちょうど Namwendwa で owenbisi が死者の上着とズボンを受けとるように、死者の帯を受けとる



Fallers の記しているバソガの相続・継承制と筆者の調査によるものとはかなり違いがあるので、細かい議論はできないが、通時的变化のひとつの可能性として、owamaka の地位が時代とともに非常に大きくなったということは考えられる。その理由は、彼が相続する土地が重要な価値をもちはじめたことである。それは単に、土地が売買されるようになったり、そこに換金作物がつくられるようになったというだけでなく、owamaka だけが先祖からのキソコに残ることができることも意味する。他の人々は土地の不足から、自らのキソコを離れるので、リネージ成員の分散という新しい事態が起きているように見えるのである。このことが owenbisi 制にどのような影響を与えたか、あるいは最初に概観したクラン首長制とどういう関係があるかは、今後の興味ある問題である。

---

ところからきた名称である。

しかし彼の述べている二種類のオムシカと Namwendwa のそれとが、そのまま対応するかどうかは疑問である。Fallers は musika owenkoba を “a successor to deadman's kinship role” とよび、その役目として、死者の子どもたちの法的な後見人、保護者になり、その政治的オフィスを継承し、できればその妻と結婚することをあげている。Namwendwa の owenbisi は前述したように、死者の妻と結婚することはあるが、死者の子どもたちの法的保護者でもなければ、オフィスの継承者でもない。それは、財産を相続する owamaka が同時に兼ねる。

他方、Fallers の二種類のオムシカと、Namwendwa のそれとの間には、選び方に共通点がある。両方とも、財産の相続者は、ふつう死者の息子の中から選ばれる。musika owenkoba は、owenbisi と同様、死者の傍系のリネージから選ばれる。具体的にいえば、まず第一の世代で、兄を弟が継承するというやり方を順次くりかえすと、最後の弟は第二世代の人に継承される。第二世代では第一世代が継承した順が、リネージ間の継承関係として保たれる。こうした傍系間での継承は五世代ぐらいまで及ぶことがある。しかしついには、系譜の記憶、居住地の距離の問題などで、この関係はくずれ、小さなリネージの分裂、独立がおこる。こうした、owenkoba によって互いに継承しあう集団は、そのことによってひとつの corporation としての性格をもち、最上位のリネージを構成する。

こうしてみると、Fallers の owenkoba と Namwendwa の owenbisi の間には、直接か間接かの交渉があったことだけは確かであろう。